

2012年度卒業研究
職場におけるジェンダー意識の変容と定着

藤女子大学文学部

文化総合学科 0915073番

氏名 粒来夏紀

担当教員 野手修

職場におけるジェンダー意識の変容と定着 目次 頁

はじめに	… 2
第一章 男性看護師の職場経験の問題点、対応	… 2
1. 他者関係の円滑化による孤立回避	
2. 期待・関心の享受と喪失による存在意義の模索	
3. 付加価値獲得の試みと失敗	
4. 職業選択への迷いと価値づけ	
5. 問題克服による看護職者としての自立と役割の拡大	
6. 職業活動と私的活動の均衡維持	
第二章 デボラ・タネンの示した男女の会話のスタイルの違い	… 7
(1) 競合的 男性の会話スタイル	
(2) 和合的 女性の会話スタイル	
(3) 「親しさ」「独立」の概念	
第三章 男性看護師の会話スタイル	… 10
分析結果	
おわりに	… 19
参考、引用文献	… 20

はじめに

人と人がコミュニケーションを取る際に欠かせないものであるのが会話である。会話は相手を理解し、情報を共有するのに重要な役割を果たしている。しかし、異性との会話の際に、会話時の反応や言い方などのほんの些細なことですれ違いを感じ、男女のコミュニケーションスタイルの違いを実感する機会が多々あるのではないだろうか。

会話における男女差の研究を行ったデボラ・タネン（2003）によると、会話の目的は、男女で異なるという。女性の会話の目的は、相手との心理的距離を縮めることである。その目標を達成するために、相手と共感することは重要であるとされている。逆に男性の会話の目的は、自分の地位を守ることにある。つまり、相手と立場が混同することはなく、情報を端的に伝えることが重要とされている。この男女の対照的な言語行動の違いはどちらかが社会的に支配的な立場にあるからとか、従属的な立場にあるからとかいうものではなく、子どもの頃の仲間同士の付き合いを通して習得されていった会話スタイルの違いから起こるものであり、男女ともにその違いを理解すれば男女間の誤解やそれに伴う悲劇は回避することが可能であるとタネンは述べている。

しかし、1日の大半を過ごす職場環境で男女比がどちらかに偏りがあり、男女どちらかのコミュニケーションスタイルが確立されてしまった職場環境では、対照的である男女のコミュニケーションのスタイルを互いに貫き続けることは可能であるのだろうか。

そこで、女性の占める割合が多い看護師という職業に目を向けた。現在、看護職は「女性の天職とされていた看護界にも男性看護師が増えてきた」と言われているが、まだまだ女性の職業というイメージを強く持たれている職業である。厚生省健康政策局看護課「看護関係統計資料」によると、男性が占める割合は2000年の3.4%から年々増加傾向にあるが、2010年度の段階で5.6%にとどまり、常に女性の割合が90%以上を占めているのが現状であり、看護における女性占有立の高さは、依然として変化が見られていない。その女性中心の職場環境では人と人のつながりを大切にして個々が複雑な交友関係網を作り上げている女性特有の社会が確立している。看護師として働く男性はすでに女性の会話スタイルが「正統」として機能している環境に男性が入り込むにははじめからハンデを背負っているわけである。その中で男性は男性らしいコミュニケーションスタイルである権威を示し、女性よりも優位な立場にしようとするスタイルを貫き続けているのではなく、タネンが発表した男性のコミュニケーション以外の新しいコミュニケーション

スタイルを築き上げているのではないだろうか。また、女性のコミュニケーションスタイルに近くなり、互いに親和を築いて会話をしていこうとするジェンダー意識の変容があるのではないかと考えた。

本稿では女性中心の環境で看護師として働いている男性看護師の方たちの会話スタイルに焦点をおき、松田、定廣、舟島（2004）による男性看護師の職業経験の解明で明らかになった男性看護師の6つの職業経験の概念について述べ、職場での男性看護師が感じる問題点や対応について説明する。第二章ではこれまでのデボラ・タネンの研究で述べられている男女の会話スタイルの違いについて考察し、論文でとりあげていく研究課題を明確にしていく。第三章では第二章での理論を参考に男性看護師として働いている20代の男性4名を対象としたフィールドワークの結果をまとめていく。そしておわりにではフィールドワークにより明らかになった、女性中心の世界で働く男性の新しいコミュニケーションスタイル、ジェンダー意識の変容について述べたいと思う。

第一章 男性看護師の職場経験の問題点、対応

松田、定廣、舟島（2004）は病院に就業する男性看護師を対象に収集した面接データに基づき、看護職集団における少数者である男性看護師が感じる職場での経験や対応は6つの概念に分けられるということを明らかにした。特定の集団における少数者は、個人としてではなく、少数を構成する集団の代表として扱われ、その特性に対する固定概念に当てはめられて知覚されるという特徴を持っている。また、その異質性のために、自らを多数者から特別視される対象として知覚する存在である。

男性看護師が自己の性に捕らわれることなく、人間として、看護職者として個性を発揮し、職業を継続していくためには、自己の職業経験を客観的に理解し、位置づけ、それに基づき行動を改善、調整することが重要であると松田らは述べている。

この章では松田、定廣、舟島が示した男性看護師の6つの職業経験における男性看護師の職場での経験の問題点、対応について説明する。

1. 他者関係の円滑化による孤立回避

男性看護師は同僚、医師、他職種などの病院職員と良い関係を築き、また、それを維持できるように努め、女性多数環境における孤立を避けている。

男性看護師は、職場内における交友関係の狭さや制約を感じ、同僚の女性看護師や男性看護師などとの関係形成に困惑し、孤立を自覚していた。孤立とは社会関係、社会的接触の境界的・極限的状況を表す。また、境界的・極限的状況とは、文化的・社会的に異質な要素を併せ持つがゆえに、いずれの集団にも同化できず、これまでの安定した適応状態が維持できなくなる危機的状況を表す。このような状況は、ある集団に属する少数者に生じやすく、他者との日常的な関わりやコミュニケーションなどの相互行為の欠如を招く。男性看護師はそれを回避するために、他職種の男性職員と交流する機会を設けたり、同様の境遇にある他の男性看護師や女性医師との関係を深めたりしていた。そして、男性看護師は、目立つような発言や行動を控え、周囲の人々との自然な調和を心がけ、良好な関係を築くことのために常に他者との関係に気を配っていた。

また、社会性の発達と主体性の喪失という両側面を併せ持ち、就業環境が変わる度に繰り返されるといふ特徴を持っている。

2. 期待・関心の享受と喪失による存在意義の模索

男性看護師は女性看護師や医師などから期待や関心を寄せられたり、失ったりすることにより、自己の存在意義がどこにあるのかを自分自身に問いかけながら、それを確認したり、探し求めたりする。

期待とは、一定の状況において、他者がどう行動するかについての予想であり、それは期待をする者の経験や社会の規範に支えられ、行動期待や役割期待として現れる。

男性看護師が寄せられる期待とは主に、物理的な力、医療機器管理、コンピューター操作に優れているといった特性、関心とは、看護職に就く男性への希少性などであった。男性看護師は、これらの特性を自己の存在意義と意味づけ、他者の期待に応えていた。また、男性看護師は、他の男性看護師の増加や女性看護師との長期交流に伴い、以前のように期待や関心を寄せられなくなってきたことを感じとり、困惑していた。このような経験から、男性看護師は、肯定的な評価を得たり、一人の看護師として承認されることを求め、そこに自己の存在意義を見出そうとしていた。

男性看護師を取り巻く環境は、多分に流動的であり、期待や関心の性質と量は、この概念が、流動的な環境に翻弄されながらアイデンティティの形成を成し遂げようとする男性看護師の経験であることを示す。また、男性看護師が他者の期待や評価を内面化するだけに留まり、自己の価値づける行動様式や行動基準を内面化することができなければ、看護職者としての自己の姿や理想を見出すことができず、アイデンティティの拡散をもたらす経験にもなりうる。

3. 付加価値獲得の試みと失敗

男性看護師は他の女性看護師にはないような付加価値を兼ね備えたいと思い、その獲得を試みたり、失敗したりする。

付加価値とは、新しく付け加えられる価値を生みし、価値とは、主体の欲求を満たす客体の性能を表す。また、価値は主体の欲求に創刊する概念であり、客体それ自体ではなく、客体の属性である。

男性看護師が獲得を試みた付加価値とは、救急救命士や臨床工学士などの諸資格、最新の医療機器管理や高度なコンピューター操作の技能、女性看護師よりも早い管理職昇進などであった。男性看護師は、自分に付加価値があるかどうかを常に意識し、専門的な知識な技術を修得するために自己学習をしたり、男性役割を発揮できる病棟に異動したりして、女性看護師との違いを明瞭にしようとしていた。これらの客体の属性とは、「女性看護師にはない」、「女性看護師を超える」と表現される「特異性」や「優越性」である。また、男性看護師は、女性看護師と同じ役割を果たせると信じながらも、男性ゆえに生じる業務上の制約や女性看護師への援助代行依頼などを余儀なくされ、劣等感や屈辱感を知覚している。女性以上の役割を果たすことができないとき、肯定的な評価が得られない、他者よりも昇進が遅れるといったことを懸念し、自信を失っていた。

4. 職業選択への迷いと価値づけ

男性看護師は看護や看護職に対する理解を深めていくにしたがって、看護職を職業として選んだことが本当に良かったのかどうか疑問に思ったり、その選択に価値を見出したりする。

職業選択を困難にする要因を調査した研究は、意思決定に自信がなく、自己の興味や技能が不明確であり、職業選択以外の事柄についてもはっきりできない者の多くが職業の選択を決定できないことを明らかにした。また、男性看護師の職業選択過程を調査した研究は、約八割の男性看護師が、他の職業への従事や大学進学を志望し、それを変更・断念した後に看護職を選択することを明らかにした。これらは、男性看護師の多くが、選択を必要とするあらゆる状況において、自己の意思決定を貫くことができないまま看護職を選択し、就業後に再度「職業の選択」を模索する男性看護師の経験である。

男性看護師が理解を深めた内容とは、健康障害に対する患者の反応、個別的な看護の重要性、看護職の役割や特徴、他の看護師との職務に対する考え方の相違などであった。男性看護師は、これらの看護や看護職に対する理解が進むにつれ、手術室や精神科病棟などの特定領域への就業による実戦経験の偏りや看護師としての特徴のなさを心配し、看護職を続けていくことに不安を感じたり、看護職以外の職業に関心を移したりしていた。その一方、男性看護師は、職業上の目標や信念を明確にし、看護職に就いたことを価値づけることもしていた。

5. 問題克服による看護職者としての自立と役割の拡大

男性看護師は職業を継続する過程において、直面する様々な問題を克服することにより、自立して看護が実践できるようになると同時に、組織構成員として果たすべき役割を担い、その幅を広げていくという。

男性看護師が直面した問題とは、知識や経験不足による看護実践の難渋、性差に伴う職務遂行上の制約、新たな役割的獲得に伴う心身の消耗などであった。男性看護師は、これらの問題を克服し、円滑かつ適切に職務を遂行するため、実践経験や獲得知識を活用する、自己の実践を評価する、他者の支援や評価を受け入れる、主体的に学習機会を獲得するといった手段を講じていた。これらの手段は、すべて自己評価の定義に表される「自分自身の状況を確認し、行動を改善、調整する」という活動に相当し、男性看護師が自己評価という手段を活用し問題を克服していることを示している。そして、男性看護師は自己の目指す看護実践を実現し、看護職者としての自信や充実感を得るとともに、後輩看護師の教育や管理職への昇進に伴う病棟運営など、組織構成員としての役割を同時に果たしていた。

6. 職業活動と私的活動の均衡維持

男性看護師は今後も看護職を続けていくために、職業活動と私的活動のバランスを保ち、その状態を維持しようとする。

職業活動は、成人期にある人間にとって、日常生活における主要な活動であり、その報酬や時間によって生活水準と生活様式を規定する。また、職業活動は、家庭生活や余暇活動といった私的活動に影響を及ぼし、職業活動と私的バランスは、両者に対する個人の重要視の度合いによって決まる。

男性看護師は、生涯にわたってこの職業を続けられるように、家族の一員としての役割遂行や趣味などの私的活動と職業活動における二つのニーズを満たす就業施設を選択したり、生活環境を変更、調整したりする。また、男性看護師は、余暇を満喫できる時間を確保したり、同僚や家族などの支援を得て就業意識を高めたりしながら、心身の調整を図っていた。

しかし、看護師の性の相違によって就業活動と私的活動のバランスの取り方に差がある。仕事と余暇活動の重要度に関する調査は、一般に、男女による性差が「余暇活動」の重要度に相違をもたらさないにも関わらず、「仕事」の重要度に相違をもたらし、男性が「余暇活動」よりも「仕事」を、女性が「仕事」よりも「余暇活動」を重視していることが明らかになった。この相違は、「男は仕事、女は家庭」といった近代社会における性別役割分業に基づく、男女の性役割観に起因する可能性が高い。

以上が男性看護師の6つの職業経験である。

この6つの職業経験から、男性看護師は主に、大多数の女性看護師とは異なる存在であることを自覚し、自己の異質性の抹消や特異性の発揮に翻弄されるという「看護職集団における性の異なる少数者ゆえの職業経験」、男性看護師が職業活動を通し、改めて看護職を選択すると共に、様々な問題を克服しながら看護職を価値づけ、自立していくという「性差に関わらない看護師に共通する職業経験」、男性看護師がどのような状況にあっても職業を続けていくことを第一に考え、それを中心に職業活動と指摘活動の充実をめざし、安定した生活を築いていくという「成人期の就業男性に共通する職業経験」の3つの職業経験をしていることが明らかになった。

第二章 デボラ・タネンの示した男女の会話のスタイルの違い

職場にかぎらず、あらゆる日常の場面で、男女の会話スタイルには根本的な違いが見られる。アメリカの言語学者デボラ・タネンが示す男女のコミュニケーションの違いの一般的な傾向を図にすると以下の図のようになる。

競合的 男の会話スタイル	和合的 女の会話スタイル
「地位」を築こうとする	「親和」を築こうとする
上下や優劣を競う	対等を重んじる
自らの独自性を強調する	相手や周囲との同質性を強調する
対立的・攻撃的な姿勢をとる	協調的・平和的な姿勢をとる
情報を重視する	感情を重視する
直接的な表現を使う	間接的な表現を使う

(田丸・金子 2001:24)

この表からわかるように、男女は正反対の行動をとることが特徴づけられている。この言語行動の性差は、社会における男女の地位の差とは結びつけず、男女がことなる言語行動をとるのは男性と女性が異なる文化に属しているからであるとした著書にタネン

(2003)の『わかりあえる理由 わかりあえない理由 男と女が傷つけあわないための口の聞き方8章』がある。タネンの著書で例としてあげられるものは誰もが体験したことのある男女のすれ違いが起こる状況が書かれており、多くの共感し、納得する内容になっている。これらの例は、男も女も、自然で正しいと思う話し方をするだけのことであり、どちらの会話スタイルも、もちろん等しく尊重されるべきである。

この章ではデボラ・タネンが主張する男女の会話スタイルの違いについて詳しく説明していく。

(1) 競合的 男性の会話スタイル

男性は女性より歴史的に社会に携わっており、互いに一段上か、一段下かという「地位」

を重んじる階層的な序列の中に身をおいて行動している。このような世界での会話は自分の優位を獲得または維持し、他人から見下されないようにわが身を守る。男は社会を「競争」の場としてとらえ、その中で自らの「地位」を築き、劣敗を避けるために奮闘している。彼らの会話は、例えば命令に対して説明を加えないことにより、つまり理由のいかんを問わず自分の要求を通させることによって自らの力を誇示することだ。(タネン 2003:33-34)

男性にとって社会とは「競争」の場であり、その中で自らの「地位」を築き、劣敗を避けることに奮闘する。「地位」を大切にす男社会は「独立」、つまり他人に従属、依存しないことが重視される。そこでは個人間の優劣があからさまに競われ、命令を下すものが一段高い地位に立ち、それに従うものが一段低い地位に立つ。「地位」の視点からすれば、相手の持っていない情報や知識、技術を持っている者のほうが一段上という意識があり、情報を教えてもらわなくてはいけないものが一段下である。男性は命令されることで自分の独立や自由が侵害されていると感じて反発している。リーダーが他の仲間に命令を下すという構造だ(タネン 2003:34)

このように、男性同士の会話は、自身の独立を保ちながら、社会階層の中に自分の地位を確立し、それを維持していくための手段であるため、できるだけ大きなグループの公的な場面で自分の意見を主張する(public speaking)ことを好み、自分の知識や技術を誇示したり、言葉巧みに話をしたり、冗談を言ったり、情報を提示したりして注目の的になろうとする。家庭内においても、公的な場面におけるような報告帳の話し方(report talk)になりがちであり、それは私的な会話には不適切であるため、必然的にあまり会話をしないことになる。

以上のことから、男性は相手と自分との立場は異なり、互いに離れた存在であるという非対称性の相互関係であることがうかがえる。例えば、話し相手が悩み事を相談してきたら、まず男性は相手に悩みの解決策やアドバイスを与えようとする。これは、解決策やアドバイスを与えるという行為は相手より一段上の立場に立つことであり、地位を守るという目的を達成できるからである。

(2) 和合的 女性の会話スタイル

女性はより「親和」に基づいた共同社会である。女性は互いに親密であるか疎遠である

かという「和合」を重んじる人間的な結びつきのネットワークに身を置いて行動する。そうした世界では会話は互いを認め合い、支持しあい、合意を生み出すなど周囲からのけものにされないためにわが身を守る。女性は地位に関心がないわけではないが、競い合うとしても和合の中なのである。和合を大切にする女社会では「親和」が重視される。そこでは総意が優先され、周囲から抜きんでは嫌われる。それゆえ女性の会話スタイルは、理由を説明することはもとより、その理由が個人ではなく、共同体全体の利益に結び付くのが特徴である。女の共同体において提案に従うことは、その提案を出した個人の力を強めるのではなく、共同体そのものの力を強めることを意味していると言える。また例えば女性が男性に比べ自慢しないのは「和合」を重視するからであり、これは男性から見ると力のなさとして解釈されてしまう。(タネン 2003:35)

同じように関節表現にも見られるが、これは、歴史的に女性は男性よりも低い地位にあったという理由で直接的な要求をしないわけではない。女性は和合を大切にするからである。関節表現そのものが力のなさを反映したものではないことは明らかである。

このように、女性同士の会話は、仲間との親しい関係を作り、それを維持するための手段 (rapport talk) であるため、類似性を強調することで対立はできるだけ避けたり、悩みを打ち明けられた時は同じように悩みを打ち明けて悩みを共有したり、また家族や友人との私的な場面での会話ではよく喋って (private speaking) 仲間との進行を深めようとする。

例えば、話し相手が悩み事を相談してきたら女性の場合は、悩み事がある相手の気持ちに理解を示そうとする。「つらかったね」「悲しいね」など相手の体験に共感することで対称性の相関関係を作ろうとするのである。つまり、女性は相手と自分は同じであり、互いに近い存在であるという対称性の相互関係であることがうかがえる

(3) 「親しさ」、「独立」の概念

タネン (2003) によると、女性の社会は人と人とのつながり (connection) を大切にする社会であり、親しさ (intimacy) という概念が鍵となっている。この社会では、個々人が複雑な交友関係網を作り上げ、差異は最小に止め、合意に達しようと努め、違いを強調するような優越性は出来るだけ外にださないようにする。

一方、男性社会は地位 (status) を重んじる社会であり、独立 (independence) という

概念が鍵となっている。人との結びつきを重んじる女性社会で重要なのは対称性、即ち人は皆同じであり、お互い同じように親しみを感じているという見方である。一方、地位を重んじる男性社会で重要なのは非対称性、人はそれぞれ異なっており、階級組織の中の異なった地位に位置しているという見方である。

ここでいう「対称性」とは、人と人とは同じであり、互いに近しい存在であって、横並びの一線に立っているという相互関係のことを表す。

また、「非対称性」とは、人と人とは異なり、互いに離れた存在で、階層の中で上下の異なった地位に立っている相互関係のことである。和合のもつ「対称性」が女の「共同体」を作り、地位のもつ「非対称性」が男の「競合」を作り出すと言える。

たとえば、他人からの「同情」も、「対称的」と見るか「非対称的」と見るかによって、ずいぶん解釈が変わってくる。「対称性」という視点に立てば、上下格差のない対等な人間からの優しい心づかいと解釈ができるが、「非対称性」の視点から見れば、一段上に立った人間からの見下したような憐みともとれるわけである。(タネン 2003:38)

以上のように、タネンの示す会話スタイルには男性と女性では会話の目的や相互関係に違いがみられるとデボラ・タネンは述べている。男女ともに相手に歩調を合わせようという気づかいがあるが、その度合いは男性よりも女性のほうが高いということがうかがえ、男性の会話スタイルのほうが優勢されているのがわかる。

では、実際に現在看護師として女性中心の社会で働いている男性はどのような会話スタイルをとって女性の集団の中でコミュニケーションをとっているのだろうか。

第三章 男性看護師の会話スタイル

第一章のデボラ・タネンが示した男女の会話スタイルの分析から、男性はたとえ親しい関係を築こうとするときでさえ攻撃に依存しているのがわかる。このような会話スタイルの特徴は男性の成長過程で自然と身につくものと予想されるが、松田、定廣、舟島(2004)が指摘するように最近の職場環境には必ずしも、自然な会話スタイルは職場の人間関係を維持する上で適切ではないことも明らかである。そこで、現在苫小牧市で看護師、准看護師として働いている20代の男性A、B、C、Dの4名に1時間程度のインタビューを行い、

普段の仕事の中で意識していることや、女性とのコミュニケーションのギャップについて感じることを述べてもらった。

〔調査実施期間〕

2012年10月から11月

〔被験者〕

男性看護師、准看護師として働く男性

〔調査方法〕

1時間程度お話を聞かせてもらい、そこから会話分析を行う

(1) 男性看護師 A の場合

Aは現在22歳で、専門学校を卒業し、今年の4月から看護師として勤務している。Aが看護師を目指そうと考えたきっかけは、母親が看護師をしており、幼いころに風邪やケガなどをおった際に適切な処置ができる母にあこがれ、自分もそういう風に誰かを助けられるようになりたいと思い、看護師を目指すようになったという。

質問：男女の会話のスタイルの差を埋めるために意識していることがあれば教えてください

回答：歳上の人ばかりなので可愛がってもらえるように言い方は悪いですが媚びていると思いますね。まだ社会人一年目なのでよろしくお願いしますといった感じで若さで押し出している感じが強いです。気を遣いながら人懐っこさを全面に出しつつ会話していますね。要は自分が可愛いので皆も可愛がってくださいという意識が強いですね。

質問：男女のコミュニケーションの違いを実感する体験があれば教えてください。

回答：ただ話を聞いてほしいと思って長々と話すのって女性特有だと思います。男性との会話は自分との話を楽しんで欲しいと僕は思っているので普段はそういった点で男女の差を感じるがあります。特に相槌の大きさとか語彙とかは人一倍気を遣っています。

Aの会話スタイルを見てみると、タネンが示した女性のコミュニケーションスタイルで

ある、互いに親密か疎遠かという和合を重んじる人間的な結びつきを重視しているスタイルをとっている様子がわかる。男性特有の社会では他人に従属、依存しないことを重視する独立という概念が重視されているが、相手に媚びているという点では、人から好かれることに関心を向け、社会を一つの共同体してとらえてその中で互いの和合を築き、孤立を避けるために奮闘しているのがわかる。

Aが媚びているというのは具体的にどのような感じかと言うと、気に入られたいと思ってお世辞を言ったり、服装を褒めたりすることが多いという。女性のほうが男性よりもお世辞を口にする頻度は高いとされている。タネンによると、女は男に比べると、なにかを言うときに相手の感情をととても重んじる女性は、相手を嫌な気持ちにさせまいと配慮し、相手をいい気持ちにさせようと努める。これがお世辞へとつながると述べる。(2001:67)

Aが気に入られたいと思い、相手のことを褒めているのは女性のコミュニケーションスタイルである親和をととても大切にしているのがわかる。

また、女性と話す際に「女性の話にはつつこみしたいと感じることが多々ありますが、我慢して相槌だけです。」とAは述べていた。相槌や語彙に気を遣っているという点から、普段の女性たちとの会話の中では聞き役に徹していることがわかる。タネンは男性は女性の会話に熱心に耳を傾けるより、自分から興味深い話を聞かせるという方法をとがちだ(2003:180)と述べているが、実際の男性の会話スタイルとは異なり、女性を気遣っていることがわかった。

以上の点からAは親和的な女性のコミュニケーションの会話スタイルをとっていることがわかった。

(2) 男性看護師Bの場合

Bは現在21歳で、専門学校を卒業し、今年の4月から看護師として勤務している。Bが看護師を目指そうと考えたきっかけは、幼い頃から祖母に手に職をつけておきなさいと言われていたことがきっかけである。その言葉から医療系への就職を目指すようになり、看護師になったという。幼い頃から女性と話すことにも抵抗はなく、女性中心の職業に就く抵抗もあまり感じることもなく看護師になったと述べている。

質問：日常の仕事の中で男女のコミュニケーションの違いを実感することがあるできごと

があれば教えてください

回答：女性は、感情的な部分で会話をすることが多いと思います。何か問題が起きた時、どうすれば解決するかではなく、それがどれだけストレスになっているかをただ誰かに主張したい、ただ聞いてほしいと思っているのかなあとと思います。僕に的確なアドバイスを求めて話しているのではなくただ話を聞く相手をしてほしいというかんじなので、結構受け流してただ話を聞いているだけといったかんじですね。

質問：女性と話すときに意識していることがあれば教えてください

回答：特にはないです。基本女性がほとんどなので、女性に対してという感じではなく、その個人個人に合わせて意識している感じです。同年代とか、親しい人たちにはあまり気を使わないで冗談とかを言い合ったりしますが、けっこう年上の看護師の人も多いので、そういう人たちには失礼がないように、誠実な態度をとるようにしています。

Bは新密度によって、会話スタイルを変えているという。先輩には自分の意見を直接言いにくいので、控えめになってしまうことが多いと述べていた。自らの意見や意向や要求を遠まわしに相手に伝えるのが「間接表現」である。これは女性のコミュニケーションスタイルの特徴のひとつである。女性はたがいの上下バランスや相手の感情を考慮するから、ものの言い方が間接的でソフトになりがちである（タネン 2001: 26）また、女性は相手の「感情」を大いに配慮する。それゆえ「情報」の伝達自体を優先させる男たちに比べると、表現は間接的になりやすい。（タネン 2001: 78）

男性は自分の弱み、悩み、誤り、過ち、そして怒り以外の感情を表現するときに間接的になるとタネンは述べるが、Bは女性のように相手の感情を配慮して間接的な表現をしていることがうかがえる。

また、親しい人たちには場を盛り上げようと思い冗談を言ったりすることが多いという話だったが、冗談とわかっているが少し怖いと言われることが最初のうちはあったという。

ユーモアの表し方や楽しみ方にも、男女の性差があることが明らかになったとタネンは述べている。たとえば、男性同士が楽しむユーモアは、「相手をけなす」儀礼にもとづくものが多い。かたや女同士のそれは「自分をけなす」儀礼が中心といえる。ここでも男は一段上に、女は一段下にわが身を置くジェスチャーが見て取れる（タネン 2001:72）

Bの職場での同世代や、親しい人たちは当然女性が多く、Bのような「けなす」「からか

う」「冷やかす」といった男性の冗談のスタイルにあまりなれておらず、冗談とわかっていても怖いといった印象を持たれてしまったのではないだろうか。現在 B は、自分はこのように風を冗談をいう人であると周囲から理解されてきたので、怖いと言われることはなくなりました。と述べていた。

質問：グループの集団の一員として親しい関係を築くために意識していることがあれば教えてください

回答：挨拶と感謝の言葉です。やはりチームとして働くという意識が強いので、普段から思いやりとか、コミュニケーションは大切にしています。

タネンが男性は共同社会の中では他人に命令することにより、または他人の命令に犯行することによって自らの地位を築いていくという。(2003:190) しかし、この B のスタイルをみると、共同社会では和合が重んじられ、互いに衝突することは禁物であると考えている女性のスタイルに近いことがわかる。B は「グループ同士で対立とかがあると気持ちよく働けないと思うので、自分は誰とでも仲良く話せるので、グループ同士をつなぐ架け橋みたいな役割をしていると思います。」と述べていた。衝突は互いの親和を脅かすものであるからなんとしても避けなくてはと考える、何事も丸く収める方向を模索しているのは女性の会話スタイルであることがわかる。

B の分析結果を見てみると、冗談を言う際などは男性の会話スタイルをとっているが、職場では親和を意識して働いているという会話スタイルや、間接表現をとっていることから、女性の会話スタイルに近いということがわかった。

(3) 男性看護師 C の場合

C は現在 22 歳で、A、B と同様に専門学校を卒業し、今年の 4 月から看護師として勤務している。C が看護師を目指そうと考えたきっかけは、中学校時代に入院をした際、看護師の方に優しくしてもらった経験から医療関係への進学を考え始めた。高校は医療系への進学に力を入れている高校で、看護師の他に、理学療法士などを目指すことも一時は考えたが、医療系クラスと同級生との意見交換や、先輩の経験談から看護師の道を目指すようになったと述べている。

質問：日常の仕事の中で男女のコミュニケーションの違いを実感することがあるできごとがあれば教えてください

回答：男性ばかりの職場を経験したことがないので、逆に女性と話す方が緊張せず話しやすいです。むしろ男性スタッフの方が気を遣います。

質問：同性の男性スタッフのほうが気を使うというのはどんな場面で特にそう感じますか

回答：もともとの気にしすぎる性格なのですが、プライベートな話をするときに気を遣います。男性のスタッフは少ないので仲良くしたいという気持ちが強いのですがどこまで踏み込んでプライベートなことを聞いていいのか気を遣ってしまいますね。その点女性同士の会話だと包み隠さずどんなことでも話題になって盛り上がっているの、女性にはどこまで立ち入っていいのかという心配がないので気楽に話すことができます。

女性は個人的な生活の詳細について語り合うことが親和を築くための基本要素だと考える。そのため、女性同士の会話となるとプライベート（私的）な会話が中心になってくる。Cは女性中心の環境にいますので、プライベートな会話することに普段から慣れているのがわかる。しかし、男性はプライベートな会話よりもパブリックなニュースを話題にすることが多いとタネンは述べている。（2003: 135）

Cが同性との会話のほうが気を遣うと覚えるのは、もともとは男性的な会話スタイルをとっていたが、職場の環境は女性中心の会話スタイルをとっているために、知らずに女性の会話スタイルを自分もとるようになっていったからではないだろうか。そのため、男性同士になるとどのような会話をしていけばいいのかわからない、どこまでプライベートに踏み込んでよいかかわからないなどと気を遣ってしまうのである。

女性中心の環境で働いていると、女性の会話スタイルに影響を受けて、Cもかなり女性よりの会話スタイルをとっていることがわかる。

質問：グループの集団の一員として親しい関係を築くために意識していることがあれば教えてください

回答：仕事の仲間として、周りをよくみて常に気を遣って行動をしています。普通のことですが、自分だったらこれをやってもらおうと助かるなって思うことを考えながら仕事して

います。

これはBのスタイルと同じである。Cも共同社会では和合が重んじられ、互いに衝突することは禁物であると考えている女性のスタイルに近いことがわかる。

Cの分析結果をまとめてみると、男性スタッフのほうが気を遣ってしまうと述べている点から、A、Bの2名よりもかなり女性の会話スタイルを受け入れており、自分も女性の会話スタイルをとっていることがわかった。

(4) 准看護師Dの場合

Dは現在26歳で大学を卒業したのちに、看護の専門学校に通い始めた。国家試験には落ちてしまい、現在は市内の病院で准看護師として勤務している。看護師を目指そうと思ったきっかけは、家族の影響が強いという。母と姉が看護師として働いており、大学を卒業してもなにもやりがいを見つけられなかったが、母と姉を見ていると自分もやりがいがあり、専門的な知識を活かせる職業につこうと思ったと述べている。

質問：仕事の中で男女のコミュニケーションの違いを実感するできごとを教えてください

回答：男性は話を聞き相槌をするだけというのが多いですが、女性は会話の中に自分の意見を入れて会話をすすめていくので会話がうまいと感じることが多いです。あとは、女性のほうが患者さんと同僚に対して言葉の使い分けがしっかりしていると思います。女性の方が世間話とか絶えずしゃべっている感じで、話すことが好きなんだなと普段働いていて感じます。

A、B、Cの3名と同様に男性は聞き役に徹していることがわかる。Dに普段の話題の内容の話をしていると、愚痴や噂話についての話題になった。そこで、Dに愚痴や噂話という女性特有の会話についてはどう思うのかきいてみた。

質問：女性同士の会話になるとやはり愚痴や噂話が多くなると思いますがそういう会話には抵抗を感じたりすることはありませんか？

回答：噂話とか愚痴は特に抵抗は感じません。情報の一つとして聞いています。そういった話は話すことでストレス発散につながるので話をきき、自分がそうならないよう気をつ

けています。

Dは愚痴や噂話を聞くことに抵抗はないが、自分からそのような話をすることは決してないという。タネンは噂話について女性が互いに親和を築く際に重要な役割を持っていると述べている。他人の生活の詳細について語り合うのは女性が自身の生活の詳細を友達に語って聞かせることの延長線上であり、自分とまわりの人間の生活に起こっている事柄を詳しく語り合うのが互いの秘密を交換しあうのと同じように子どもの頃から女の友情には大切な要素であり、また新たな友情を生むきっかけになるという。(2003:123)

男性の多くは第三者に自分の話をした場合、勢力バランスが崩れることをとても心配している。つまり、自分の弱みを相手に見せれば、こちらが一段下に立つ格好になるし、自分の不利になる形で悪用されかねない情報をわざわざ他人に教えるのは考え物というわけである。男性同士は2人だけの秘密を第三者に話すのは一種の裏切り行為ととらえているため、親和を築くために秘密を語り合うことはしないという。(2003:134) このDの話す普段のコミュニケーションスタイルは男性特有のものであるとわかる。

また、A,B,Cの3名にも噂話や愚痴について質問したところ、陰でこそこそするのは嫌いだからそういう話はしないようにしているなど、3名ともDと同じように愚痴や噂話に対して自分は参加せず、話を聞いているだけという消極的なスタイルを貫いていることがわかった。愚痴や噂話をすることでストレス発散になるという意識はなく、陰でこそこそと話をするに、男性はかなり抵抗を感じているのがわかった。主なストレス発散方法は、趣味に没頭したり、食事などによって発散するという一方で、女性のように愚痴を話してストレス発散になるとはあまり感じないと述べていた。

分析結果

男性看護師は、体力的な面では男性がいると助かると思われていると思うが、年配の女性患者には女の看護師さんにしてくださいと敬遠された経験もあるといった話もうかがった。

看護職というのはまだまだ女性中心の職場であり、男性は女性との性差をかなり感じ、肩身の狭い思いをしているのを感じた。その肩身の狭い思いが、会話スタイルの変化に結

びついているのではないだろうか。

今回 A、B、C、D の 4 名にフィールドワークを行った結果、いくつか共通点が見つかった。

まず、4 名とも「和合」をかなり意識したコミュニケーションスタイルをとっており、男性特有の、競合的で「地位」を重視するスタイルをとることはさけ、孤立を避けようとしている傾向があった。孤立しないように、目立つような言動を控え、周囲の人々との自然な調和を心がけおり、序列を意識したスタイルというよりは他者との間に良好な関係を築くことにより、女性のコミュニケーションスタイルに適応していることがわかった。

また、女性は悩み事を聞いてあげる際に、それについて相手にあれこれ質問をくりだして、詳細を知ろうとすることによって、こちら側の関心なり心配なりを相手にも示そうとする。だから男性が細かいことを聞かずにすぐ話題を変えてしまうと、女性は相手が自分に共感してくれていなとか親和がかけていると感じるとタネンは述べる。(2003: 80)

その点、今回インタビューを行った 4 名の男性は、女性は感情的におしゃべりをするものであり、口出しなどはせず、ただ話を聞いているといったコミュニケーションスタイルをとっており、女性とのコミュニケーションスタイルの差を理解した上で、女性と接していた。これは、第一章で示した男性看護師の職業経験で示した、男性看護師という少数的な立場が円滑なコミュニケーションをとろうと思い、衝突を避けようと思う職業経験が、女性よりの会話スタイルをとっているという結果につながっているのではないだろうか。

そして、女性のコミュニケーションスタイルをとりながらも、男性特有の会話スタイルの特徴も現れていた。冗談を強い口調でしゃべってしまったり、噂話や愚痴には抵抗を感じる、といった面である。

女性中心の職場にいと、会話スタイルがかなり女性よりになってくることがわかったが、愚痴や噂話、ユーモアのスタイルについては男性特有のスタイルを貫いているのはやはり男性同士は互いの間に親和を築くために秘密を語り合うことはしないという習慣や、相手をけなす冗談を言うのは幼いころからの男性同士の付き合いで習得され、日常会話でよく使われてきた会話スタイルであるからではないだろうか。はじめにでも述べたように、子どもの頃から今まで築き上げてきたコミュニケーションのスタイルを変えることは難しいということがわかった。今回インタビューを行った 4 名は、自分から愚痴や噂話をするのではないが、話を聞くことはするということから、親和を築こうと努力していることが

わかった。これは、第一章で示した他者関係の円滑化による孤立回避につながるのではないだろうか。

また、今回インタビューした4名に伺ったところ、タネンが示す男性の「地位」、「序列」を重視した話し方や意識をしたことはないという回答だった。タネンの示した男女のコミュニケーションスタイルは今回のインタビューで当てはまっている部分もあったが、時代とともにかなり変化していることがわかる。

現代用語の基礎辞典（2012年版）によると、草食男子など、〇〇男子という言葉が雑誌やネットで流行し、従来とは異なる男性像を表す新語も増え、同世代の男性は以前の男性よりも男らしさがなくなったと言われている。これは、バブル崩壊後の経済停滞が男性の精神構造に影響を与えているのではないかという指摘もある。このように時代とともに男性像が変化し、女性中心の職場で働く男性は、競合的なスタイルを貫こうとしないで、女性の会話スタイルをとることに抵抗を感じるものがなくなった。そして孤立をさけるために親和を築こうとし、周囲に溶け込んでいくようになっていったのではないだろうか。

おわりに

職場における男性と女性は、個人としての能力に大きな性差はないが、男性と女性がかかわりあうときには、対人姿勢や会話スタイルの性差が結果的に女性の方が不利な立場におかれる傾向が強いとタネンは研究で明らかにした。

しかし今回、4名の男性看護師にインタビューを行った結果、少数者である男性看護師はかなり女性に気を遣いながら働き、女性と親和を築き上げていることがわかった。男性看護師は男性が優位であるという意識を持たず、女性看護師の集団の中の一員として周囲の和を乱さず、親和を築いていた。インタビューの結果から、タネンが示した男性の会話スタイルに当てはまる部分もあったが、歴史的に看護という職業は、白衣の天使を象徴とした女性の職業という社会的イメージがあり、男性看護師は肩身の狭い思いをしている。特に、多数派である女性看護師との関係維持に苦心するということから、自然に孤立を避けようと、親和を築こうとする女性の会話スタイルをとっており、男性看護師はかなり女性よりの会話スタイルをとっていることが明らかになった。

看護職の性別による役割区分というものがまだまだ改善されておらず、男性看護師は勤

務場所が精神科など力が必要である病棟へ配属され、女性と区別されるということもあるという。力仕事など、男性的な面では男性看護師はかなり周囲から頼りにされている部分もあるが、業務内容において、女性看護師と区別されることがあることに抵抗を感じるという。このような抵抗を感じる場面があるために、男性看護師は男性的な会話スタイルを貫いていくのではなく、女性よりの会話スタイルをとるようになるのではないだろうか。看護職へと就職する男性の受け入れがまだ完全に整っておらず、女性の職業というイメージが強いということも、男性の会話スタイルの変化に大きく影響していることがわかる。

また、タネンの示す男女の会話スタイルは、男性のほうが優位を示しているスタイルであったが、私たちと同世代の男性を指す草食男子などの言葉が現れるなど、昔の男性像にはなかった部分が現代には現れてきている。時代によってジェンダー像は変化を遂げており、会話スタイルも新しくなっているのである。

互いの会話スタイルを理解することで、すれ違いや争いを避けることができる。今後もしも移り変わっていくジェンダー像に目を向けていくことが大切であると感じた。

参考、引用文献

- 北林 司・荻原英子・鈴木珠水他（2007）「臨床で男性看護師が経験する女性看護師との差異」群馬パース大学紀要
- 黒田満智（2007）「職場におけるコミュニケーションの男女比」卒業研究・論文要旨集 藤女子大学文学部文化総合学科
- 自由国民社（2012）現代用語の基礎知識 2012年版
- デボラ・タネン著 田丸美寿々訳（2003）『わかりあえる理由分り合えない理由 男と女が傷つけあわないための口のきき方8章』講談社
- デボラ・タネン著 田丸美寿々・金子一雄訳（2001）『どうして男は、そんな言い方 なんて女は、あんな離し方 男と女の会話スタイル9 to 5』講談社
- 松田安弘・定廣和香子・舟島なをみ（2004）「男性看護師の職業経験の解明」看護教育学研究 日本看護教育学学会
- 吉田早希（2010）「日常会話におけるラポールの形成 男性のコミュニケーションを例

に」 卒業研究・論文要旨集 藤女子大学文学部文化総合学科
就業看護師数の年次推移（厚生労働省平成 22 年衛生行政報告例）